

大場磐雄博士資料目録 I

國學院大學日本文化研究所

表紙の写真は末永雅雄先生から送られたもので、「楽石雑筆」巻16によれば榎原神宮の立柱上棟式当日阪本課長に同行して神宮付近拡張工事中発見の遺跡を見学したことがみえる。昭和13年11月のことで、この写真は11日末永先生の撮影かと思われる。付けられていた末永先生の20日付手紙には、「写真餘りよくないですがお送りします」とある。大場先生40才の時、この後12月17、18日にも榎原遺跡を訪ね、井戸遺構や出土遺物を撮影している。大場・末永両先生の交友関係を示す記念すべき写真である。

(杉山林継)

序

國學院大學日本文化研究所所長

國學院大學学術フロンティア事業運営委員長

杉 山 林 継

平成11年文部科学省(当時文部省)の私立大学学術研究高度化推進事業の学術フロンティア推進事業の拠点として國學院大學日本文化研究所も認められ、「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」を主題と決め推進してきた。國學院大學は創立120周年を迎え、戦後新たに設立された日本文化研究所もまもなく50周年を迎える。この間、学問研究も年を経て進行し、文書資料・考古資料等の蓄積も多く、これを近代・現代における学術資産として活用することを考えていこうとした。そして、まずは昭和50年に他界された故大場磐雄博士の多量の資料、特にガラス乾板は図書館の書庫内で横積みになっていたことから、これを何とか整理して利用できるようにしようとした。実は以前から考古学研究室では乙益重隆・小林達雄・吉田恵二氏により一部目録をとりはじめられていた。大場資料は、拓本・図面・焼付写真・抜刷等、もともと先生ご自身によって分離され、生前整理箱に分類されていた。ガラス乾板は別に小箱さらに大箱に入れられて整理されていた。これら資料はその内容を大筋で知っている人により時々利用されていた。しかし、目録がないためその利用は一般化しなかった。今回、旧石器、縄文、弥生、古墳時代の目録をようやく公刊することができた。このあと、歴史時代、祭祀などがあり、続けて刊行することを計画している。一方で、乾板の整理も進み、この目録はとりあえずCDにした。この両者で大場資料の多くが概観できる。

また、本年度、大場先生が世話をして大学へ寄贈をうけた柴田常恵資料のうち、焼付写真の目録を一冊刊行した。これも大場先生御自身が実行したかった事業とも言える。このように5年目にしてようやく出版物も整いはじめた。

平成13年度からはインターネット上でも一部の資料を公開していることから、各地の博物館や教育委員会からの問い合わせもあり、資料活用の幅も拡大されていることが感じられる。これら画像資料そのものを利用した研究報告も次々と発表され、ようやく研究活動が軌道に乗り始めたといえる。

しかし、この画像資料等の利用法に関する研究は分類、目録、あるいはキーワード検索など一部進行させているもののまだ満足できるものではない。

平成15年度で5年間の当初計画を完了し、次のステップに進むように計画しているが、大学の渋谷再開発計画との関連もあり、数年はこれまでの劣化画像資料を中心とした研究活動を継続すると共に、現在計画中の國學院大學学術センター棟(仮称)の建設と、これまでの成果による研究方法論を拡大した近代学術資産の有効利用を考えている。

神道・日本文化の研究では他に類を見ない國學院大學という独自性の中で、研究発展させ、次代のメンバー育成と公開を原則とした資料活用をさらに推し進めなければならない。

大場博士資料目録がより多くの人々に利用されることを祈りたい。

平成16年3月

例 言

1. 本書は、平成11年度～平成15年度國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」の成果の一部であり、國學院大學が所蔵する大場磐雄博士資料の目録第1集である。
2. 本書には、大場磐雄博士資料目録のうち、I. 旧石器時代編・II. 縄文時代編・III. 弥生時代編・IV. 古墳時代編を収録した。
3. 大場磐雄博士資料の保管ケースには、その内容毎に名称が付されており、各ケース内には更に内容物を細分した分類袋が納められている。整理にあたっては従前の箱番号・名称等を尊重し、目録の目次はこれに従った。
4. 目録の目次や一覧表には「*」で示した箇所があるが、それは資料に記載された原文のうち、判読不能であった文字を示すものである。また、一部の漢数字については、算用数字に書き換えた箇所があり、資料に記載された年月日については、大正を「T」、昭和を「S」と略記した部分がある。
5. 目録は複数年次にわたって作製したため、記述に若干の不統一が見られる。本書の編集にあたっては、極力その統一に努めたが、なお十分でない部分もあるかと思われる。以上の点については、読者諸賢の御寛恕を請いたい。
6. 本書には、附編として國學院大學が所蔵する大場磐雄博士写真資料のうち、I. 平出遺跡編・II. 登呂遺跡編・III. 常陸鏡塚古墳編・IV. 信濃浅間古墳（桜ヶ丘古墳・妙義山古墳群ほか）編を収録した。
7. 大場磐雄博士写真資料については、資料番号・撮影対象・撮影年月日・備考を付記した。整理作業では、箱・袋に記載された注記を手がかりとして撮影内容の確認を行なったが、公刊された報告書の記載に依ってキャプションに若干の手を加えた箇所がある。
8. 大場磐雄博士資料の整理、並びに目録作製は、市村ゆみ子（平成12年度～13年度）・岩崎厚志（平成13年度）・深澤太郎・山添奈苗（平成14年度～15年度）が担当した。また、その支援を目的とする國學院大學大学院リサーチアシスタントには、仲田大人（平成12年度）・岩崎厚志（平成13年度）・深澤太郎（平成14年度）・阿部昭典（平成15年度）が充てられた。
9. 本書に掲載した大場磐雄博士写真資料の整理については、荒井裕介・遠藤美穂・加藤里美・杉山章子・関根信夫・高野晶文・中村耕作・山内利秋が担当した。
10. 本書の編集は、杉山林継（國學院大學日本文化研究所所長）の統括の下、加藤里美（國學院大學日本文化研究所兼任講師）を中心に、田中秀典・深澤太郎・山添奈苗がその任にあたった。また、写真図版の作製に際しては、中村耕作の助力を得た。
11. 目録の作製、並びに本書の編集に際しては、以下の個人・機関から多大な御協力を得た。記して感謝申し上げる次第である。

稲生典太郎氏・内川隆志氏・片山祐介氏・小出義治氏・小林達雄氏・桜井浩司氏・塩尻市立平出博物館・新原佑典氏・中野知幸氏・中村大氏・根本祐樹氏・藤田征史氏・藤本強氏・村松洋介氏・吉田恵二氏（五十音順）

目 次

序	杉山林継
例言	
目次	頁
解題	1
I. 旧石器時代編	
旧石器時代編の概要	7
旧石器時代編 目次	8
旧石器時代編 資料目録	9
II. 縄文時代編	
縄文時代編の概要	13
縄文時代編 目次	15
縄文時代編 資料目録	24
III. 弥生時代編	
弥生時代編の概要	75
弥生時代編 目次	79
弥生時代編 資料目録	86
IV. 古墳時代編	
古墳時代編の概要	119
古墳時代編 目次	123
古墳時代編 資料目録	137
附編 大場磐雄博士写真資料	
I. 平出遺跡編	
平出遺跡の概要	245
平出遺跡編 写真資料	247
II. 登呂遺跡編	
登呂遺跡編の概要	307
登呂遺跡編 写真資料	309
III. 常陸鏡塚古墳編	
常陸鏡塚古墳編の概要	327
常陸鏡塚古墳編 写真資料	329
IV. 信濃浅間古墳（桜ヶ丘古墳・妙義山古墳群ほか）編	
信濃浅間古墳編の概要	339
信濃浅間古墳編 写真資料	341

解 題

大場磐雄博士(1899～1975)は、『神道考古学講座』全6巻の刊行など、神道考古学を体系化した業績で知られている。博士の学風は、考古学・民俗学・文献史学のいずれにも精通しており、「ウエットな考古学」と評されることもあったが、その背景には3人の師に接してきた経歴があった。



博士が考古学を志したのは正則中学校在学中のことであり、備忘録である『楽石雑筆』の大正2(1913)年条には、「芝公園に於て竹内運平氏(地理教師)より介墟につきて聞き、且つコロボックルなる語もきく。これ我が最初に得たる考古の考へなりき。」とある(註1)。当時の考古学界は、日本列島の先住民はコロボックルかアイヌか、といった人種論争が、前者の説を唱えた坪井正五郎博士の病没によって終結を迎えて間もない頃であった。従って、大場青年の関心も、当初は先史時代の考古学に向けられていたようであり、実際に昭和初年までの主要な論文は、縄文時代を対象としたものが多くを占めている。

中学校時代から採集旅行などを頻繁に行ない、各種学会に入会するなど、同好の士と友誼を結びつつあった大場氏ではあるが、國學院大學に入学する大正7(1918)年9月より一年半ほど前から鳥居龍蔵博士の門を叩いたことは、生涯初めての転機であったに違いない。大学在学中も引き続いてその薫陶を受けることとなるが、鳥居博士の教示を受けて巨人伝説の採訪に取り組むなど、考古学に止まらない多角的な視点を授けられたのである。もっとも、「われ思ふ。巨人伝説は石器時代と関係あり。」というように(註2)、それは考古学との関わりを重視してのことであった。

大学では折口信夫博士と出会い、民俗学の分野を本格的に学ぶようになる。それまで蒐集してきた巨人伝説についても、「伝説てう語のあまりに漠然として、歴史・小説と区別つかざるより民譚というべし」との言葉を受けて(註3)、処女論文を「武蔵の巨人民譚」と名付けた(註4)。大学在学中は郷土研究会の中心的メンバーとして活躍し、折口博士も「私の民俗学に対する情熱は、此人及び谷川磐雄さん・高橋正秀さんの学生時代の清らかな心によつて煽られた事が多いことを述べて置く。」と回顧している(註5)。言うまでもなく、この「谷川磐雄さん」とは大場博士のことであり、民俗学を考古学の片手間としてではなく、専門的にこれを学んだことが窺われるのである。その成果は『民俗叢話』という一冊の単行本に結実した(註6)。

また、トーテミズムについて折口博士の指導を受けたことも、その後の研究方向を決定付ける上で重要な画期となった。大学卒業後の4年弱は、神奈川県立第二横浜中学校で教鞭を執ったが、考古学や民俗学の論文を矢継ぎ早に発表していった時期である。もちろん、諸磯式土器の研究など、ここで触れておくべき論考もあるが、「日本石器時代民衆の生活状態」や「石器時代宗教思想の一端」を忘れることはできない(註7)。そこでは、土偶を中

心として縄文時代の信仰に関わる問題を考察しており、大場青年が精神世界の復元に関心を深くしていく背景には、折口博士からの影響があったと見るべきであろう。

さらに、大正14(1925)年末から内務省神社局考証課に席を置き、後に東京帝国大学教授として神道講座を担当することになる宮地直一課長の厳しい指導を得て、同僚の文献史学者と切磋琢磨したことも大きい。考証課は神社の昇格審査の際に、その由来や社宝の綿密な調査を行なうため、そこに考古資料も役立てたいとする大場氏の思いは日に日に募っていったはずである。

そのような中で、大場氏が神道考古学を提唱するに至る直接的契機が訪れた。周辺に古墳や古社が現存しないものの、祭祀遺物の出土が認められた静岡県洗田遺跡を昭和2(1927)年に踏査した際、夕日を背景とした三倉山の神々しい山容を拝して「一種の靈感に打たれ」たことが、氏をして神道考古学の道に誘う導火線となったという(註8)。また、宮地博士の名を借りて『神社と考古学』執筆し、神社考古学を(註9)唱えたことは、かかる学問の体系化を目指した第一歩となった。内務省在職中には、神道考古学の基礎的論考を収めた『神道考古学論攷』を刊行している(註10)。

その後、恩師であった折口博士の勧めもあり、昭和23(1948)年に博士の学位を取得し、翌年には本学教授に就任した。学位論文は『祭祀遺蹟—神道考古学の基礎的研究—』に収録されている(註11)。

後に佐野大和氏は、大場博士から「僕の考古学は考古民俗学だよ」と聞かされたことを回顧し、「先生の神道考古学は、単なる「神道に関する考古学」ではなくて、「考古学、民俗学、文献学の三位一体の神道研究」だったと見ることもできよう。それは言わば、いう所の「古代学」であり「新国学」でもあった。」と評している(註12)。折口博士の言葉を借りれば、新しい国学とは「合理化・近世化せられた古代信仰の、元の姿を見る事」であり(註13)、両博士の方法論は異なるものの、目指すところは同じであったということができようか。

研究のスタンスも、師の姿から学んだことだろう。鳥居博士はアジアを股にかけて活躍し、折口博士は民俗採訪の旅を事とした。宮地博士も各地の神社を調査して回った。大場博士は、息つく暇もない旅の考古学者であった。大場博士の略年譜を通観すると、度重なる考古・民俗・歴史資料を採訪する旅行の記録を目の当たりにすることになる(註14)。今日、我々に残された大場磐雄博士資料は、その旅の蓄積なのである。

さて、博士の考古学的調査の軌跡に目を向けると、数々の学史的にも著名な遺跡の発掘を手掛けている。千葉県菅生遺跡の調査は昭和12(1937)年から断続的に行なわれ、第3次調査が終了したのは昭和48(1973)年のことであった。菅生遺跡の特徴は、極めて良好な状態で木器や木製品が出土したことであり、このような経験は、昭和18(1943)年に始まった静岡県登呂遺跡での調査に大いに反映されたのである。既に大塚初重氏も指摘しているように、木製品の保存技術が未発達であった当時、その原状を記録することは急務であり、メモ、そして写真は有効な手段となった(註15)。時とともに変形していく木製品を数多く見てきた大場博士は、写真による記録の重要性を誰よりも理解していたことであろう。

また、本書の附編に写真資料を掲載した長野県平出遺跡や茨城県常陸鏡塚古墳、そして長野県桜ヶ丘古墳・妙義山古墳群も、博士が調査した代表的な遺跡である。

一方、学内においては、鳥居博士が創設した上代文化研究会の後身である國學院大學考

古學會の会長として若手研究者を育成し、『国学院大学考古学研究報告』シリーズの刊行や考古学専攻の設置等、研究・教育環境の整備に尽力された。

このような広い視野と、小唄や都々逸もこなす洒脱な江戸っ子としての側面もあった大場博士ではあったが、闘病中の昭和50（1975）年6月7日に亡くなった。

77年の生涯で大場氏が残した研究業績は、上記の諸単著や『大場磐雄著作集』などに収録されているほか、國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」において整理を進めている大場磐雄博士資料・大場磐雄博士写真資料がある。大場磐雄博士資料と、写真乾板やネガなどからなる大場磐雄博士写真資料は、氏の没後、遺言に基づいて本学が寄贈を受けた資料であり、多数の画像資料・図面等は調査当時の生々しい成果を今日に伝えるものとして評価が高い。

大場磐雄博士資料は、氏が自ら調査・蒐集した資料と、寄贈を受けた資料の双方が含まれており、紙焼き写真・実測図・拓本のほか、報告書等の書類・地図・カード・新聞等の切り抜き・絵葉書・書簡などからなる。保管ケースにはその内容毎に名称が付されており、各ケース内には更に内容物を細分した分類袋が納められている。整理にあたっては従前の箱番号・名称等を尊重し、目録の目次はこれに従った。全体で約150箱存在しており、これまでにⅠ. 旧石器時代編1箱・Ⅱ. 縄文時代編18箱・Ⅲ. 弥生時代編13箱・Ⅳ. 古墳時代編32箱の整理が完了している。その実態は、本書を通観することによって御理解頂けるものと思う。

また、Ⅴ. 歴史時代編についても、全56箱のうち前半26箱までの目録は平成15年度の年次報告として公開した（註16）。今や、整理作業も祭祀編・外国編などを残すのみである。その全貌については、全資料を整理した暁に、改めて紹介することにした。

これらの資料は整理が済み次第、順次電子情報としても公開している（註17）。本書を手にして、また電子情報を閲覧して頂くことによって、情報提供者と閲覧者との情報交換を進めていくことは、本事業の本旨とするところである。読者諸賢の指摘を通して、本書の精度は益々向上するのであって、むしろ次々と改訂が加えられることを期待したい。

（加藤里美・深澤太郎）

註

- 1) 大場磐雄 1975 「考古歴史」『楽石雑筆』大場磐雄著作集6 雄山閣
- 2) 大場磐雄 1975 「ダイグラボッチ考」『楽石雑筆』大場磐雄著作集6 雄山閣
- 3) 大場磐雄 1975 「葛の葉狐の話（国文学会）」『楽石雑筆』大場磐雄著作集6 雄山閣
- 4) 大場磐雄 1919 「武蔵の巨人民潭」『武蔵野』
- 5) 折口信夫 1930 「追ひ書き」『古代研究』 大岡山書店
- 6) 大場磐雄 1926 『民俗叢話』 坂本書店
- 7) 大場磐雄 1922 「石器時代宗教思想の一端（一）」『考古学雑誌』13-4
大場磐雄 1923 「石器時代宗教思想の一端（二）」『考古学雑誌』13-5
大場磐雄 1923 「石器時代宗教思想の一端（三）」『考古学雑誌』13-8
大場磐雄 1923 「日本石器時代民衆の生活状態」『中央史壇』9-1
- 8) 大場磐雄 1960 「神道考古学生い立ちの記」『具体例による歴史研究法』 吉川弘文館
- 9) 宮地直一（大場磐雄） 1940 『神社と考古学』考古学講座16 雄山閣

- 10) 大場磐雄 1943 『神道考古学論攷』 葦芽書房
- 11) 大場磐雄 1970 『祭祀遺蹟—神道考古学の基礎的研究—』 角川書店
- 12) 佐野大和 1976 「解説」『古典と考古学』大場磐雄著作集5 雄山閣
- 13) 註5 文献に同じ。
- 14) 大場先生記念事業会 1975 『楽石 大場磐雄先生略年譜並著作論文目録』
- 15) 大塚初重 2002 「大場磐雄博士と登呂遺跡」『平成13年度 國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』 國學院大學學術フロンティア事業実行委員会
- 16) 國學院大學學術フロンティア事業実行委員会編 2004 『平成15年度 國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』 國學院大學學術フロンティア事業実行委員会
- 17) 詳しくは、下記の國學院大學學術フロンティア事業実行委員会ホームページを参照されたい。
<http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/>